

恋をする、ということとは、その存在すべてを欲することなのだ。知る。彼の表情も、声も、心も体も、すべて。すべてが、欲しい。

「……っ、静雄さ……っ？」

帝人を布団の上にそつと横たわらせる。本来は、そのまま彼を眠らせるつもりだった。……っつい先ほどまでは、確かにそのつもりだった。

名を呼ぶ帝人は、目を開いてはいるものの、未だに眠りの世界を半ばたゆたつている。

とろんとした目で、どこか不思議そうに見上げてくる彼に、そつと唇を重ねた。

「……っ」

びくん、と彼の体が震えた。かまわず、そのまま舌を彼の口腔へと進入させる。彼の舌を躊躇わず捕らえた。そのまま、本能が望むまま彼の口腔を蹂躪する。

「ん、……んっ」

狭くて小さな口、滑らかな歯、柔らかな舌。逃げようとする舌を捉え続け、しばらく飽きることなく食った。それはそれなりの時間だったようで、ようやく少しの満足を覚えて唇を離してやると、帝人は必死に空気を取り込もうとする。どうやら酸欠状態にしていたらしい。

いかにも、キスになれていない、というその様子にさらに少しの満足を覚える。考えてみれば当たり前だ。数日前のキスですら、初めてだと言っていた。ならば、舌を絡めるキスも当然初めてなのだろう。

自分が最初だ。彼にキスするのも、彼の肌に触れるのも。そう思えば、独占欲が多少は満たされる。

だから、彼の衣服に手を伸ばすことにも躊躇いは生まれなかった。欲しい、だから手を伸ばす。奪つてでも手に入る。それは当然の摂理でしかなかった。

「……ちよっ、何、静雄さ……っ」

帝人が慌てた様子で自分を呼ぶ。けれど、答えてやることはなかった。それだけの余裕が今の自分には存在しない。彼の衣服、そのボタンに手をかけ、外そうとする。それすらもままならない。苛々として、力任せに引き裂いた。静雄にとつて、それはあまりにも容易なことだ。ボタンがはじけ飛び、服はだたの布きれと変わる。

「や、……っ、嫌です、や……っ！」

明確に何をされるか理解したのか、嫌です、とはっきりと帝人が拒絶の言葉を口にする。静雄の手を止めようと抗いもする。けれど、それはすべて無駄でしかない。

そもそも帝人はそう力強い人間ではないだろうし、多少力自慢であったところで、静雄に比べれば幼子同然だ。

それでも暴れられるのは面倒だと判断し、力づくで帝人の両腕を後ろ手にさせ、元は帝人の着ていた服、の残骸である布を適当に彼の両手首に巻き付けて拘束した。それでも足をばたつかせるが、その程度はまあいいか、と思う。

「おとなしくしてろ。怪我したくねえだろ。俺だつてさせたくねえ」

声をかけたのは、余裕が生まれたからではなかった。